

ね 天の日嗣と しらし來る 君の御代御代 敷きませる 四方の國には
山河を 廣み渾みと 奉る 御調寶は 數へ得ず 盡しも兼ねつ 然れども
吾大王の 諸人を 誘ひ給ひ 善き事を 始め給ひて 金かも 樂しけくあ
らむと 思ほして 下惱ますに 鶏が鳴く 東の國の 陸奥の 小田なる山
に 金ありと 奏し賜へれ 御心を 明らめ給ひ 天地の 神相納受ひ 皇
御祖の 御靈助けて 遠き代に かかりし事を 朕が御世に 顯してあれば
食國は 榮えむものと 神ながら 思ほし召して もののふの 八十伴の雄
を まつろへの むけのまにまに 老人も 女童兒も 其が願ふ 心足ひに
撫で給ひ 治め給へば 此をしも あやに貴み 嬉しけく 愈思ひて 大伴
の 遠つ神祖の 其の名をば 大來目主と 負ひ持ちて 仕へし官 海行か
ば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大皇の 邊にこそ死なぬ 顧みは 爲
じと言立て 丈夫の 清き彼の名を 古よ 今の現に 流さへる 祖の子
等ぞ 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立 人の子は 祖の名絶た
ず大君に 奉仕ふものと 言ひ繼げる 言の職ぞ 梓弓 手に取り持ちて
劔大刀 腰に取り佩き 朝守り 夕の守りに 大王の 御門の守護 我をお
きて また人はあらじと 彌立て 思ひし増る 大皇の 御言の幸の 一に云
聞けば貴み 一に云ふ、貴

この歌は有名な歌でありまして、歌全部を知らぬまでも「海ゆかば水漬く屍
山ゆかば草生す屍 大皇の邊にこそ死なぬ 顧みはせじ」といふところは日本國
民として知らぬ人はまづないのではないかと思はれる程です。しかも本當に徹底
した得難いよい句だと思ひます。

聖武天皇が奈良の東大寺の大佛を御造營になりましたが、その途中で資金が不
足いたしました。その時（天平二十一年二月）幸ひにも陸奥國小田郡といふところ
ろから、黄金九百兩を獻じました。天皇は佛恩の深きに感泣なされて、年號を天
平感寶とお改めになられ、東大寺に行幸なされて、このことを御奉告になり、群

臣に詔みことりを下され、位をも賜はつたと申すことでございます。
 それで越中守であつた家持も、從五位上に昇進されたので、非常な喜びと賀ことばぎを以てこの長歌を奉つたのであります。歌の上には、その真情が溢れ溢れてゐることは、よむ者の深く感ずるところでありませう。この歌の意こころを極く、あらましに申してみますと、

高天ヶ原から天下りまして、我が日本國をお治め遊ばされた瓊瓊杵尊以來、御代を重ね皇位にあつて、次次に御支配なされた御歴代の天皇の御統おすべになつた天下は、山川が立派でその國國から奉る御貢物の寶は澤山あつて數へることも出來ず、盡くすことも出來ない。しかしながら我大君が諸人をお導き遊ばされて、大佛を造るといふ貴いことに、御着手なされたが、黄金が不足するいま、それがあつたらどんなに嬉しからうとお思ひになつて、御心深く惱んでをられたとき、東なる陸奥の小田郡の山に、黄金が見出だされたとき奏上する者があつて、陛下は御惱み心を御晴しになり、これは朕の大願を天地

の神神が御受納あそばされ、皇祖の御靈がお助けになつて、昔の代にもなかつたことを、朕の御代にあらはされたのであるから、御統治あそばす天下は榮えることであらうと、神の御意のままに、大君は思召して、群臣また民を従はしめなびかせると共に、老人も女も童等も彼等の願ふ心が満足するやうに慈くしみ御治めになつたから、その御恵みを人人は誠に尊く、嬉しいことに愈々思つてゐる。

それにつけても、我が大伴一族の遠い先祖は、その名をば大來目主おほくめぬしといつて朝廷にお仕へした武官の家である。海をゆくならば屍を水の中にも捨てよう。山をゆくならば屍を草の間にもさらさう。大君のおそばでこそ死なう、あとをふりかへつてみるやうなことは、決してしないと、大丈夫まさらむたる立派なその名を、遠い昔から現在に至るまで、傳へて來た先祖の子孫たる我等であるぞ。大伴氏と佐伯氏とは祖先のたてた誓言にあるとほり、子孫達は先祖の名を絶やさず、大君に仕へ奉るのだと言ひついで來た格別の官職であるぞ。それゆ

ゑに、我等子孫は梓弓を手にもち、劔太刀を腰にはいて、朝に夕に朝廷を守
護り、御門の護りとしては我等の他にはその人はあるまいと、大君のこのた
びの御詔のありがたさをうけたまはれば、真に貴く感じ愈々家のことを名の
ことを思ひ誠に貴い次第である。

この歌はよんで直接に感受するのが、誠に味はひが深いのでありまして、端か
ら端まで理解しようといふやうな、あせつた心を捨てて、ゆつたりと解つたとこ
ろは解つたとし、解らないところは解らないで、ただ歌として、暗誦じたのしむ
のもよいことであると思ひます。これに三首の反歌がともなひますが、それは簡
單に次に申しておきませう。

反歌三首

(4095) 丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸を一に云ふ、貴聞けば貴み一に云ふ、貴

(4096) 大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立て人の知るべく

(4967) 天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く

天平感寶元年五月十二日、越中國守の館にて大伴家持之を作る。

一番初めの歌は、大君の御詔書の忝けなさを深く心に御うけして、貴くおそれ
おほいので、丈夫心がふるひたつ程の思ひを覺えるといふその心から詠まれた歌
であります。第二の歌は、我が大伴氏の遠い先祖の墳墓は、立派にしるしをた
てよ、世の人人が一見してそれとわかるやうに、と祖先に對する信仰を歌つたも
のであります。第三の歌は、我が大君の御代が榮えるために。東の國なる陸奥
の山に黄金の花が咲いたことである。と時の奇瑞を歌にしたものであります。

第二十講

一九八

前講に、家持といふ人の歌好きであることを申しましたが、まことに家持の残した歌をよんでゆきますと、この人はしんから底から生まれつき歌が好きで、始めの間は古人のよい歌を好んで読んで、その人人の心の後を追つて、自分もそれに真似、さういふ口調や感情をもつて、ある點では、類型的な歌を讀んで喜んでゐたかの如き時代もありましたが、よみ進みゆくと、さすがに歌人としての家持は、それだけで満足はしてゐませんでした。

その詠みぶりにも、自ら種類の工夫をこらして、様様な試みをして、つひに家持獨特の歌境を開拓したのは、歌好きと言つてもそれがそこらにさらにゐる歌好きといふ人のやうな淺墓なものではなくて、徹底した歌人であつたことを、今更

感心する次第であります。

たとへば卷の八に、

(1597) 秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露おけり

といふ家持の歌も、昔、天武天皇の御製である

(27) 良き人の良しと能く見て良しといひし芳野よく見よ良き人能く見つ

また坂門人足の歌、

(54) 巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思ふな巨勢の春野を

のやうに、韻を踏んでおもしろく詠み出だされたそれを真似てよんだものでありませうが、よみくらべてみて分るやうに、家持の歌は、まだまだ未熟の作といは

一九九

なければなりません。ここに語る十九卷におきましても、その心持は分るとしても、歌として本當に成功してゐない作もありますが、晩年にいたつて、全く獨自の境地に入り得てゐる歌を詠み出してゐることに、私は何時も感心させられてをります。

天平勝寶二年三月一日の暮、春の苑の桃李の花の眺闕して作れる歌

(4139) 春の苑そのくれなるにほふ桃ももの花した照る道みちに出で立つまよめ 媛め

この一首は可成り有名な歌であり、同時に愛誦してゐる人もあるだらうとは思ひますが、歌として成功した歌とは私は思ひません。島木先生の御批評を借りて言つてみますと、「第一句、第三句第五句三箇所で切れてゐる句法が、現さんとする景情に對して硬すぎてゐるのみならず、その切れ句が皆名詞止めであつて、この歌の場合特に窮屈を感じしめる。「春の苑」も要らない句である。春などと斷らずとも春といふことは現れてゐる。觀念的な歌ひ方をすると、斯ういふ句が生れるのである。」とあるのも、人各々の好きずきだとしましても、この歌が一首通してよい歌の調べをなしてゐる歌だとは思はれません。すでに家持の時代は、萬葉時代も末になつてゐて、何か新しい歌境の開拓を自然に願つてゐた時とはいへ、新しい歌風を興して率ゐてゆくほどの力は具へてゐない、といふ感がいたします。

この歌を譯してみれば、

春のお庭に紅色に照りかがやいてゐる桃の花によつて樹の下が映えてみえる道に、出で立つてゐる少女よ。

と言つて春たけな酬なはにならんとする美しく、にはほしいものを現はさうとしてゐるのでせう。しかしそれはこちらで補つて考へることで、音樂的に現はさうとする意圖でありませうが、充分に成功してゐるとは申されません。しかるに、この十卷の終りに書かれてある三首の歌は、獨特の境地を拓いた歌と驚かされる程の、進歩をもつた歌であります。

二十三日、興に依りて作れる歌一首

(4290) 春の野に霞かすみたなびきうらがなしこの夕ゆふかげにうぐひす鳴なくも

この歌について言つてみませう。

春の野に霞が棚引いて、何となく心かなしい。この夕日の仄かな光の中でうぐひすが鳴いてゐる。

と譯せるのでありまして、かなり進歩した文化人が特にもつてゐる寄り所ない、説明のしやうのない心悲しさといふやうな詩的感情にふれて歌はれてゐるところは、全くこれまでの人の詠んだ悲しみの感情より一歩進んだ境地に入つて、そこを歌ひ得てをりますので、歌境が大きい進歩の後を示してをり、それだけ人間としても進んだ、知識人としての心境にふれて、歌ひ得てゐると思ひます。

同

(4291) わがやどのいささ群むらたけ竹吹く風かぜの音ねのかそけきこの夕かも

この歌について申してみますと、

私の家の、「いささ群むらたけ竹」といふ句については「いささかなる群竹」といふやうに、従来申されてをりましたが、澤瀉久孝博士は昨年、アララギで「群又は篠のやうな小竹をさしたものと見ておいてよからうと思ふ。そこで『群竹』の竹は竹の總名であり『い小竹』によつてそれが限定されることになり、『い小竹』と『群竹』とを重ねることによつて、竹の『すがたかたち』と、『ありやう』とが、はじめてあざやかに示されることになる。『いささ』をいささかあるの意とすれば竹の種類は全然語つてゐない事になり、孟宗竹のやうな大きな竹でもあり得る事になる。」とあります。参考として書抜いてみました。細い竹群に吹く風の音が、かすかに聞えるこの夕方よ。

といふほどの極めて微妙な感動を選びわけて、微細な詠みぶりをしたよい歌であります。

竹の葉は少しの風にもさやさやと、まことに風情のある葉ずれの音を聞くことの出来るもので、その少しの風になるかすかな竹の葉ずれの音をいはば浮世の雑音の中から、聞きとめ、聞きわかる時の作者の心は極めて繊細な神経の動きをとらへてゐるのであります。これもたしかに文化人として進んだ感動をもつて、歌はれた歌と申すべきでせう。

荒唐しいものから洗はれて、整理された内心の聲に耳を傾けてゐる人でなくては、詠み得ない歌といふ感が深いのであります。

二十五日、作れる歌一首

(4292) うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも獨しおもへば

春日遅遅として、鶴剛正に啼く。悽惻の意、歌に非ずば、撥ひ難し。
仍りて此の歌を作り、式ちて緒緒を展ぶ。

この歌に來ると、更に、前に申した特徴をはつきりと持った優秀な歌であります。

うららかに照つてゐる春の日に雲雀が高くあがり、と邊りの情景をうつして、直ちにそれに關聯があるやうな、ないやうな唯なんとなくものがなしく思はれることだ、獨りで思ふともなく、ものを思つてゐると。

と特殊な真情を歌つてをります。これもいはば萬葉初期の時代の人の歌からみれば、神経の勝つた歌でありまして、春の日が一杯に照つて、雲雀などが鳴いてゐる風景を唯たのしめるといふやうな呑氣な時代は遙かに過ぎて、かうしたのどかな風景に向つて、心の寂寥感を歌ひあげてゐるところは、近代人の感覺と近いものがあると思ひます。

とに角づつと萬葉をよんで來て、この二三の歌に向ふとき時代が移らうとする、さうした、なんともいへない感じに微細にふれて來る思ひがいたします。「獨しおもへば」は獨りで物を思つてゐることです。

雪の日作れる歌一首

(4226)

この雪ゆきの消遺けのこる時ときにいざ行ゆかな山橋やまたちばなの實みの光てるも見みむ

右の一首は、十二月、大伴宿禰家持之を作る。

まことに氣持のよい印象的な詠みぶりといふべく、

このいま積つてゐる雪がすつかり消えない中に、さあ行かうよ、そして山橋の色づいた實が照り映えるその美しさも見よう。

といふ程の心を詠みいでたのでありまして、山橋の實といふのは「やぶかうじ」のことと言はれてあります。やぶかうじの實は赤い小粒の實であります。可愛らしい小粒の赤い實が消え残る雪の間に點點と見えるのは、いかにも美しいものでせう。

可愛らしい美しさを、いとしみ詠まれたものであります。やはり貴公子きこうしらしい上品な味ある歌と思ひます。

以上の歌をとほして、家持といふ人の人柄を廣くも深くも悟らせられることのでありませう。

第二十一講

これから、一番終りの巻の第二十についてお話をいたします。

第二十巻のもつとも特色をなしてゐるのは、この中に集められてある防人の歌でありませう。防人といふのは、今日で言つてみますと、新兵、二等兵であつて、この名が我國の古い史蹟に見えはじめたのは、大化二年であつたと記されてあります。

此の人人は初め東國の壯丁から選ばれて、筑紫の海邊の防備にあてられたものでありますが、いろいろの都合上、天平九年にこの制度をあらためて、筑紫人を遣はして壹岐、對馬を守らせることになりましたが、歴史によりますと筑紫人は東人のやうに勇敢でないといふので、やがて再び東人が防人として送られるやうになりました。

防人の任期は三年で二月一日が交替期日でありました。防人が任地におもむく時には、その本國から難波津まで防人部領使といふものが、國司の命令によつてこの人人を指揮し、難波津からは、兵部省の役人が附添つて、太宰府に送られたのであります。

この天平勝寶七歳の防人たちの歌が集められたといふのは、大伴家持の力によるもので、この時家持は兵部省の兵部少輔といふ役からであつたので、歌ずきの家持はこの人人の歌を集めて整理しました。

東國の謂はば學問のない人人の歌でありましたので、東國訛の言葉などを、そのまま詠みこんであるやうなものも、皆取り入れて集めて置きましたので、それが後に一つの大きな特色をなし、萬葉集の中でも、この二十巻の防人の歌といへば、讀む人に愛好される特殊な歌となりました。

その歌について申してみませう。

天平勝寶七歲乙未二月、相替りて筑紫に遣さるる諸國の防人等の歌

(4321) 畏かしこきや命みこと被かふり明日あしたゆりや草かえが共むね寐ねむ妹いむ無しにして

右の一首は、國造くにのみやつこ丁長ちやうぢやう下郡しもほり物部秋持

この歌の中に特に不思議に思はれるのは「明日ゆりや」といふ言葉でありませうが、これは「明日よりや」の訛でありまして「明日からは」といふ意味になります。

第一句の「や」と此の第三句の「や」と二つまでやが使つてありますが、此處に防人として召された壯丁の若き興奮がこめられてありますので、歌の意味は畏れ多きことよ勅命を被つて、明日から防人として國土を離れて、草を枕にはるばる筑紫に越くことになつた。

と畏れつつしんで一氣に詠み下し、最後の句に来て妻と別れてゆく切なる情を述べてをります。

目下日本は國を擧げて戦ひの中にあるので、さまざま切なる事變歌を聞かされます。實に雄雄しく勇ましい歌であります。

かうした折から私はよく防人の歌を書いてくれ、語つてくれといふ註文を受けます。それは事情に一脈相通するものがあるからであります。然しここでひとつはつきりさせなければならぬことは、防人の歌と今日の出征兵の歌とは、事情の迫つたものと、ただちに迫つてゐないものとの微妙な相違があり、また時代性の大なる相違があることであります。

防人の歌には表面的に歌を讀み味はへば、或は女女しいと誤解されるかもしれない程に妻を思ひ、親を思ひ、子を思ひ、随分この人人に心を殘して旅立つ歌が見受けられますが、これを以て決して女女しいなどと淺薄な解釋はせぬやうに、古歌を味ひ分けるには、この偽りなき純情を笑つてゐては、到底その眞情を味ひ分けることが出來ないのであります。

むしろその素樸なる偽りなきまじりなき心の調子を曇りなく歌ひ上げてあると

ころに、いにしへびと古人の正直さがあり、古の歌の面白さがあるのであります。歌はそこ
まで入つて味はないと、眞の價値はわからないのであります。表面に現れた
もので、淺薄にものを定めてしまはないやうに、かういふ言葉は、どういふ眞情
から生れて來るかといふことに就いても、深く味はひ分けねばなりません。

(4327) 我が妻も晝にかきとらむ暇いづまもが旅行く我われは見つしぬばむ

右一首は、ながのしものこほり長下郡 ふるまろ物部古磨

この歌はいかにもさもあつたらうと思はれる歌でありまして、遠き昔、汽車も
汽船もなく電信電話もない時代に九州までも下つてゆく長旅をすることは、大變
なことでありますから、挨拶に人が來たり、自分も別れの挨拶を言ひに行つたり、
どのやうにか忙しい日が續いた事でありませう。

その間にさへもいとしく思ふ我妻の姿を晝に書きとつて行きたい程の願ひが湧
いたでせう。その暇もがなと願ふ己を率直に歌にしてゐるのがいいのでありますし

て、何のためにその暇を願つてゐるかといふならば、これから旅立つて行く自分
は、せめて妻の晝をみながら、妻を偲ぼうといふ眞情なのであります。

なんといふ無邪氣な素直な、普通ならばそれとも表に現はさないやうな事を、
大聲で少しもおくせず、一直線に歌ひ上げてゐることとせう。それがかへつて哀
れが深い思ひが致します。

赤彦先生は「今ならば寫眞を持つて行きたい處である」と評されてをりますが、
やや、ユウモアがあつて、適所をついてゐると思はれます。

(4328) 大君みことの命かしこみ磯いそに觸ふり海原うら渡る父母ちちを置きて

右の一首は、すけのよぼう助丁丈部造人麿

「大君の命かしこみ」といふ句が、何の躊躇もない絶對の叫び、天に服する地
のものと、君に服する己といふものに、寸分の隙もない、このやうな句を生んだ
のは、理窟でも學問でもなく、その眞情の聲であつたことを深く思ふべきであり

ます。

この「大君の命かしこみ」といふ言葉は、萬葉集の中に二十三箇所、用ひられてある由であります。それがみな至情の聲であることを思ふと「日本人と歌」といふことにまでおもひ及んで、尊い極みであると思ひます。

島木先生の御解釋から引いて申してみますと、「磯づたひ船をやりつつ、故郷に遠ざかる感慨の聲であらう。目に見えるものは知らぬ海陸、心に思ふものは父母である。磯に觸り、といふ寫生ありて、船の進行が動いて見え、従つて、作者の孤影望見の状まで想像に入つて來るのである」とありますが、實に申分のない解釋と思ひます。

(4337) 水鳥の發ちの急ぎに父母に物言ず來にて今ぞ悔しき

右の一首は、上丁有度部牛麿

如何にも實感直情的に歌ひあげられてゐる歌で、今そこにその人を見るやうな

心地が致されます。

水鳥の發ちの急ぎのやうに急いで夢中で出發して、野山の道を黙々と歩いてゐると、心が落付いて來る。落付いてくるといふと空虚な感に打たれる。それは發つ時のさわぎにとりまぎれて、しみじみと父や母の瞳をみつめて心からなる「いつて參ります」を言はないで發つて來てしまつた、その夢中であつたことが口惜しいのであります。とり返しのかぬことをしてしまつたやうに、大切な時を惜み悲しむその思ひに切實に打たれてゐる心の聲であることがよく分ります。

此の間私が事變の歌を讀んで居りますと、出征する夫を汽車に送つて行つた妻が、汽車が動きだしてから、夫が一目自分の目を見てくれればよいと思つて夫の目を追つてゐるけれど、遂に自分と瞳が合はないで、夫は遠く行つてしまつたといふ歌を詠みまして、その妻の心中を思ひやり、私もしばし空虚な寂寥な感に打たれたのであります。

この歌にもさうした、しみじみとした思ひが、溢れるばかりに感じられる得難

い歌だと思ひます。尙、この防人については、別に詳しく書いたものがありますので、少しく重複致しますが、次講に掲げておきますから、御参考までにお読み下さい。

第二十二講

萬葉集の卷の二十に天平勝寶七歲乙未二月、相替りて、筑紫に遣さるる諸國の防人等の歌、といふものを集めてある。

防人は随分古い時代からあつたもので史籍に見えた始めは、大化二年であつたとしてある。これらの防人はその國の守に引率されて難波まで陸路をゆき、そこで兵部省の官吏に引渡す、そこで朝廷から檢校の勅使をつかはされる。勅使の檢閱が終れば兵部省の役人がこれを引きつれて難波から船で筑紫に送られたものであつた。それで萬葉集の中にも古い防人の歌が散見するけれど、この天平勝寶七年の時には大伴家持が丁度兵部少輔であつたので、歌の好きな家持はその防人の引率者に命じて各々に歌を作らせ、それを自分の許に集めさせた。そして自

身それに撰をして非常に拙いものを取去つた後これを編しておいたものが、卷二十に加へられたものである。

防人の歌には東國の訛があり、率直に思ふところを思ふ通りに歌つてあるので、卷十四の東歌と共に萬葉集中特色あるものとして永く今日に至るまで、世の人人から愛誦されてゐる。

現在の日本は非常時下にあるので私はよく防人の歌を語つてくれと、注文をうける。それは無理ないこと、全く戦地にゆく兵の氣持と相通ふ心情を歌つた歌も多くあるが、唯今日の戦時氣分をもつて防備にゆく人人の歌の心をそつくり當はめるわけにはゆかない。唯しかし理窟なしに「君の御楯となる身である！」といふことを各自が心に深く奉體してゐたことは千年の昔も今も變りはない。そこに神代ながらの我國の世界に類のない國民性をみるのである。

現代のやうに汽車や汽船や飛行機や、電信電話の交通の便の全くない、一國を越えて旅することだけでも既に水盃を交して旅立つた程のいふにはれぬ旅を九州まで續けてゆくといふこと、また難波（今の大阪）の港から船出する船も今日の汽船のやうな設備のとのつたものではなく、風にまかせ、櫂を揃へ荒海を漕いでゆくといふ危険極まる旅路であつたから或は生き別れが死別れになつた人もあつたであらう。さういふ點が今日命を捨てて出征する兵等の氣持と防備に行つた古代の防人の氣持と深く相通ふものがあるのであつて、特に古への人は皆純情であるから、家あるひは親、妻などを思ふ心持を大つぴらに無邪氣に率直に歌にしてゐる、その歌がまた甚だ傑れたものなのである。悲しんだからとて女女しく逃げかくれするやうなものも一人もなかつた。皆「大君の命かしこみ」といふ心を深く理窟なしに持つてゐた。これが日本人の眞情である。偉さうな理窟や理論をいひ立てたのは外つ國と交通が開けてからのことで古への日本人は理窟をいはないで本當に君のため、國のため、といふことには身を捧げることの出來た國民であつた。このことは賀茂眞淵や、本居宣長がはつきりと書き遺してゐる。これだけの心持をもつて讀み味ははないと防人の歌の如何に眞情を吐露したものであ

るか、如何に傑れたものであるかといふ本當の味はわからない。いはゆる賢夫、賢夫人を考へてゐては歌は聲のみ大きく、内容のつまらぬものになつてしまふ。

(4374) 天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島をさして行く吾は

火長 大田部荒耳

純情をもつて詠みあげてゐる歌であつて、天地の神を祈つて矢を箠にさし、私は筑紫の島を指して行くのである。といふ歌で、この歌の心情は、現代の人達が考へるよりも古代の人達が、より一心の信仰をもつて詠んだ歌であることが分るだらうと思ふ。「幸矢」などといふ言葉も「天地の神を祈り」といふ詞も、みな今日の人が思ひ及ばぬ程の信仰をもつて詠まれた言葉であつて、矢は何としてものを射止めることが目的である。その射止める矢に幸あれ、と願望する心が、「幸矢」といふ詞になつて表はれたのであらう。その幸ひは神から下されるものであると、深く信じてゐた時代、その心から湧いた歌聲である。如何にも男男し

く、ものの夫らしい心組をもつて、矢張り自分は防人として立派にとめて來ようといふ、深い覺悟の現れた歌として實に味はひ深いものがある。

(4370) 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は來にしを

那賀郡上丁大舍人部千文

「霰降り」といふのは「鹿島」にかかる枕詞であつて、霰の降る音が、かしましいといふことから鹿島の枕詞となつたものらしい。

鹿島の神は武甕槌命を祭祀してあり、今も常陸國鹿島郡鹿島にまつられてある鹿島神社である。この神社は昔から今に至るまで、武の神として名高いのであるが、同時にこの作者は常陸の國から召された防人であることがわかる。すなはち武の神であり、自分の郷土の神である鹿島神社を祈りながら、大君の統べたまふ名譽ある兵として私は來たのだ！ と非常に自ら感激してゐる心を歌つたものであつて、この「御軍」といふのは、戦のことをさしてゐるのではなく、大君の統

べたまふ軍兵といふ意でよんだものである。最後の「を」は、私は感動詞だとうけとる。これには種種説もあるけれど、この歌としては、どうしても「を」と感動して他の氣持を入れない方が立派な歌と思ふ。たとへば「吾は來にしを」と感動して、「勳をたてなければ徒らには歸られぬ」と解する人もあるが、この詠みぶりはそれよりも、もつと單純に率直に防人はおのれを感動してゐるところでとめてあるものだと私は思ふものである。歌はそれがよいので、ごちやごちやといろんなものを盛込むよりも、徹底した真情を率直に歌ひあげる、このゆき方は素朴な人のゆき方であると信するのである。

(4322) 我が妻はいたく戀ひらし飲む水に影さへ見えてよに忘れず

主帳 丁 龜玉郡若倭部身麿

理窟なしにこの歌をよい歌と思はぬ人はないと思ふ。強い歌をよむばかりが防

人の歌ではなかつた。その眞にうたれるものがある。歌の意は、私の妻はひどく私を戀慕して居るらしい。「戀ひらし」は「戀ふらし」の關東訛である。「かこ」も訛で「かげ」である。この時代の信仰として、先方でさういふ状態になつた時、こちらへ響いてくるといふことを信じてゐた。それでこの防人の若倭部身麿が、家を離れてゆく道で、途中に湧く清水を一杯飲まうとして手に掬んだとする、その水にふと残して來た妻の面影が夢まぼろしの如く見えたのであらう。それは自分が戀渡つてみたといふよりも、妻がいたく自分を戀慕してゐる、その思ひが水に面影となつて見えたのだ、とかういふやうにうけとるのが古代の人の信仰であつて、自分が思つてゐるから見えたといふよりも、妻の思ひが影になつてそこに見えた、といふ信仰になつて詠んでゐる歌であつて、更に思ひが深いのである。すべて古歌を味はふのには、この信仰を心において味はふべきものと思ふ。「よに忘れず」は「げに忘れられない」といふ意味になるのであつて、如何に夫婦の愛情の濃やかであるかを理窟なしに感得させられる。

(4416) 草枕旅行く夫が丸寝せば家なる我は紐解かず寝む

妻棟椀部刀自賣

いかにも上代の婦女のまじめな、さうして愛情の深い心の聲をきく歌であると思ふ。この婦人はもとより學問のあつた人とは思へない。そのころの關東地方には文學さへもなかつたので、唯その真心のあらはれが歌になつてゐる。即ち「草枕」は旅の枕詞で、防人として召されてゆく我夫が、着る布團もなく帯も解かず着のみ着のまままで苦勞をして旅をつづけてゆくと聞けば、家に居る私は夫の苦勞にとりなつて帯もとかずに寝ませう。といふのである。

この心意氣は今日の銃後の婦人達が深く感動させられねばならないのであつて、自分はこの地にとどまつてをつつても、心は寸時も休まず夫と共に、或ひは防人と共に苦勞を分けてゐる、その真心のあらはれた得がたい作と思はれる。引つづいて妻の歌として今一首。

(4425) 防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが美しき物思ひもせず

かういふ歌を読むと、千歳も昨日の如しといふ氣がされる程その眞劍さにうたれる。たとへば一軒の家で防人に出ることになつたとする。今でいへば旗をたてたり、人の出入が繁かつたり、物物しいその家の前を通りがかりの人人が小聲で「まあ、防人に召されてゆくのは何さんの御主人であらうか」などと噂して通り過ぎる人を見て、その召されてゆく人の妻が、物思ひもなささうに噂して通り過ぎてゆく人達をうらやましく思ふ心持、これは決してそのお召しにあづかつたことに對して彼れ此れ思ふのではなくして、立ちゆく人に對して思ひが一杯になつてゐる時、物思ひもなささうに話あつてゆく人達のうらやましさを、と女らしい美やみをした無理からぬ當事者の心境を歌つたものである。實に今日でも、ひしひしと胸に來るものがある。

(4350) 難波津に装ひ装ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに

鎌倉郡上丁丸子連多磨

あはれな事實として深く味ははれる歌と思ふ。自分達の乗つてゆくべき船が難波港で、船装ひされてゐる。「装ひ装ひて」といふことは、幾日も幾日も日を重ねて装ひされてゐることを立體的に想像させる言葉である。さて装ひなつて今日の日や、と力をこめて愈々出發するその勇ましい光景の中にあつて、たちまち國に残る母を思ひ、見る母なしに、と結んだ所、萬貫の結句としてゆるぎなく、しかもこの防人の優しくかつ男男しい性格が自らに歌ひ出されてあるのである。歌はすべてからゆきたいもの、とよむたび私は感心させられる。

(4316) 父母が頭かき撫で幸く在れていひし言葉ぞ忘れかねつる

丈部稻麿

防人に召されて行く人人は壯丁であるから、妻のすでにある者も又まだ無いものもあつたに相違ない。現在の徴兵年齢からいつても數へ年二十一歳が適齡であるから大凡そ想像がつくのである。それで防人の歌をよんでゆくと、夫婦の情合の實にこまやかな歌があるのと同時に、まだ何處か乳くさい可愛らしい純情に泣かされるのがある。この歌の作者などは、まだ妻をもつてゐない、父母に愛撫されて、丈夫で勵めよ、と言はれて來てゐる。そのお言葉が忘れかねるといふ所に微塵も嘘がない。清水のやうな混りなきものを受けるのである。「幸く在れて」は「幸きくあれと」の關東訛である。

(4364) 防人に發たむさわぎに家の妹が業るべき事を言はず來ぬ
かも

茨城郡若舎人部廣足

おもしろい歌だと思ふ。前にも述べた通りに、防人に發つ人の家のさわぎは一方ならないものであつたらしい。人の出入りが繁く、且つ旅の用意も整へなければならぬといふやうに寸暇を得ないものであつたらう。それでその騒ぎのかしましさに我が妻に自分の出かけた後の大切な生業のことを、よくいひおいても來なかつたのが、心がかかりである。といふ歌であるが、年からみればこの人は前の青年よりも年上の人であらう。そして「業るべきことを」と經濟問題にふれて詠んでゐる所は誠におもしろい歌と思ふ。今日の出征兵士の方方の中にも同感の方があるだらうと思はれる。

(4359) 筑紫方に舳向る船の何時しかも仕へ奉りて本郷に舳向かも

長柄郡上丁若麻績部半

非常に傑れた歌と思ふ。素朴な東人の心情を調子にもよくあらはしてある。自分の乗つてゐる船が筑紫に向つて舳先きをむけて走つてゐる中で、自分が十分に防人としての勤務を仕へ奉つてから、恙なく故郷へ歸りたいことを思つてゐるのである。即ち、今筑紫の方に向つて舳先きをむけてゐるこの船が、何時の日にかお務めを果たしてその舳先が故郷の方へふりむけられ、そちらに向つて歸ることになるであらうか。と詠んだのであつて、防備にむかつてゆく人のつましい願望。「何時しかも仕へ奉りて」は自然な人間の聲であらう。さういふ時でも務めの重さは深く心に持つてゐるのである。

索引

アの部

茜あかねすむらさき紫野ゆき
 天あまさひなかる夷の長道ゆ
 浅茅原あさぢ原つばらつばらに
 あしひきの山やまさへ光り
 相念あひおもはぬ人を思ふは
 あしひきの山川せの瀬の
 天あまさひなかる鄙ひなに五年いっご
 吾あが主ぬしのみたま賜たまひて
 天地あめつちと別わかれし時ゆ
 天あまの原はらかぎりも知らぬ

七、一六

三三
 三八
 四三
 五四
 七九
 一〇五
 一〇五
 一一一
 一一四

秋風あきかぜは冷すずしくなりぬ

秋萩あきはぎを散ちらす長雨ながあめの

あしひきの山やまの雫しづくに

吾あを待まちつと君きみが沾ぬれけむ

朝影あさかげに吾あが身みはなりぬ

相坂あさかをうち出でて見みれば

天あめの下したすでに覆おほひて

葦原あしはらの瑞穂みづほの國くにを(長歌)

秋あきの野のに咲さける秋萩

天地あめつちの神かみを祈いのりて

霞降あせり鹿島かしまの神かみを

イの部

磯いその上に生おふる馬醉木あしびを

不聴いなといへど強しふる志斐しひのが

一一四

一一七

一三〇

一三〇

一三六

一四三

一八一

一九一

一九九

二二〇

二二一

二二四

三三一

いなといへど語れ語れと	三二	大君の遠の朝廷と	三五
今更に何をか念はむ	四七	凡ならば左も右も爲むを	七四
石激る垂水の上の	八九	大の浦のその長濱に	九六
家にあらば筥に盛る飯を	一二四	大橋の頭に家あらば	一〇一
何時はしも戀ひぬ時とは	一三〇	大舟の思ひたのめる	一四五
愛子汝夫の君(長歌)	一七五	大宮の内にも外にも	一八二
いにしへよ偲びにければ	一九〇	大伴の遠つ神祖の	一九六
ウの部	五九	大君の命かしこみ	二一三
瓜食めば子等思ほゆ(長歌)	一一一	カの部	六三
采女の袖吹きかへす	一三一	風雜り雨降る夜の(長歌)	七四
うち日さす宮道を人は	一四六	春日山霞棚びき	一五七
馬買はば妹歩行ならむ	二〇四	風がもの言ひや(民謡)	一六七
うらうらに照れる春日に		歸りける人來たれりと	一七一
オの部		勝間田の池は我知る	

長きや命被ふり明日ゆりや

二一〇

キの部

君待つと吾が戀ひ居れば
 君なくば何ぞ身装飾はむ
 君が行く海邊の宿に
 君が行く道の長路を
 君により吾が名はずでに

四五
 一〇七
 一六〇
 一六四
 一八三

クの部

百濟野の萩の古枝に
 草枕旅の憂ひを(長歌)
 くれなゐの薄染衣
 草枕旅ゆく夫が

九一
 一〇四
 一四一
 二二四

ケの部

今日よりは顧みなくて

八八

今朝の朝け雁が音聞きつ

九四

コの部

巨勢山のつらつら椿
 琴取ればなげき先立つ
 今年ゆく新嶋人が
 駒造る土師の志婢麻呂
 この雪の消遣る時に

二一、一九九
 八一
 八五
 一七四
 二〇六

サの部

福のいかなる人か
 小竹の葉はみやまもさやに
 さしなべに湯沸せ子ども
 防人に行くは誰が夫と
 防人に發たむさわぎに

八二
 一二二
 一七〇
 二二五
 二二八

シの部

しろがね 金も玉も

六一

級照る片足羽河の (長歌)

一〇〇

下毛野安蘇の河原よ

一五二

信濃なる須賀の荒野

一五五

スの部

天皇の御代榮えむと

一九七

ソの部

空みつ大和の國 (長歌)

一四三

タの部

たまきはる宇智の大野に

一三

たけばぬれたかねば長き

二七

田兒の浦ゆうち出でて見れば

三六

旅人の宿りせむ野に

一〇八

瀧の上の三船の山に

一二六

二三四

邂逅に吾が見し人を

一三四

旅にあれど夜は火燭し

一六二

立山に降り置ける雪を

一八六

チの部

父母が頭かき撫で

二二七

ツの部

月たちてただ三日月の

七三

筑波嶺の裾廻の田井に

一〇四

椽の袷の衣

一三八

筑波嶺に雪かも降らる

一五一

筑紫方に船向る船の

二二九

ナの部

菜の花や (俳句)

二一

九月のその初雁の

九六

難波津に装ひ装ひて

二二六

ニの部

庭に立ち麻を刈り干し

五一

ヌの部

ぬばたまの夜の深けぬれば

六八

ぬばたまの夜さり来れば

八一

ぬばたまの斐太の大黒

一七三

ハの部

春の日の霞める時に (長歌)

一〇〇

唐棣花色の移ろひ易き

一四一

箱根路をわが越えければ

一四五

春の苑くれなるにほふ

二〇〇

春の野に霞たなびき

二〇二

ヒの部

東の野にかぎろひの

二〇

人はみな今は長しと

二七

久方の天の露霜

五五

一つ松幾代か歴ぬる

七七

ひさかたの天の香具山

一〇九

人の植うる田は植ゑまきず

一六六

フの部

零る雪はあはにな降りそ

二九

振仰けて若月見れば

七三

降る雪の白髪までに

一七九

ホの部

佛造る眞朱足らずば

一七二

マの部

丈夫とおもへる吾や

七七

二三五

卷向の山邊とよみて

八一

まそ鏡もたれど吾は

一四六

松の花数にしも

一八四

丈夫の心思ほゆ

一九六

ミの部

み吉野の象山の際の

六八

水鳥の發ちの急ぎに

二一四

モの部

桃花榻の浅らの衣

一四〇

ヤの部

山笹に霰たばしる

二三

大和道は雲隠りたり

七五

大和道の吉備の兒鳥を

七六

ユの部

わが宿のいささ群竹

二〇三

我が妻も晝にかきとらむ

二一一

我妻はいたく戀ひらし

二二二

ヲの部

乎久佐牡子と乎具佐助丁と

一五三

雄神河くれなるにほふ

一八七

二三六

夕されば小倉の山に

九三

行けど行けど逢はぬ妹ゆゑ

一三三

ヨの部

吉野なる夏實の河の

四〇

世間を憂しと耻しと

六四

長き人の長しと能く見て

一九九

ワの部

吾背子は何處行くらむ

一一

わが背子がくべき宵なり

四六

吾背子は物な念ほし

四七

吾が屋戸の夕蔭草

五三

我が屋前の萩の末長し

一一五

渡津海の豊旗雲に

一二〇

我面の忘れむ時は

一五六

萬葉讀本

初刷五千部



昭和十五年六月五日印刷
昭和十五年六月十日發行

定價一圓五十錢

著者 今井邦子

刊行者 東京市麹町區三番町一
長谷川巳之吉

刊行所 東京市麹町區三番町一
第一書房

電話九段 一四一五
三三四四

牛込區山吹町三ノ一九八
印刷者 萩原芳雄

滿洲・朝鮮・臺灣・樺太等の

外地定價一圓六十五錢

* 落丁・亂丁の際は直接本社にてお取替へいたします。

今井邦子著

萬葉讀本

四六判二四〇頁
定價一圓五十錢

この書は『萬葉集』をひたすらむづかしいものと思ひこんで、この寶庫の扉に手を觸れないでゐる人々に、この驚嘆すべき古典に心からなる敬愛を抱かせ、愛着を感じさせるやうに、極めて解り易くその解釋と鑑賞の筆をとつたものである。著者の高き教養と深き理解と細心な配慮の一切が傾けられてゐるこの書は、萬葉のもつ至上至深の藝術境をつたへて餘すところがない。

今井邦子著

歌と隨想

四六判三六九頁
定價一圓三十錢

本書は歌と隨筆と評論と感想と紀行と、著者の代表作悉くを網羅して著者の全貌を傳へんとするもの。閑秀歌人の第一人者、教養ある文化人として、また名流社交婦人として、その風貌とその豊富な生活とは、この選集の隨所に溢れて居る。萬葉を始め、古典文學の情緒豊かな心境を説き、隨筆感想に師を語る。その觀照深く、惠まれたる天資は茲に美しい飛躍をとげてゐる。

岡山 巖著

短歌文學論

四六判三四四頁
定價一圓三十錢

本書は、短歌論を人間學にまで高めた。短歌が人間の生命の直接的な表現である限り、短歌論は當然人間學として出發しなければならぬ。著者は茲に短歌を、「人間の文學」「人間創造の文學」として、これに新しき出發を與へんとする。更にこの立場より短歌を現代文學の主流たらしめ、民族詩として再起せしめ、國民精神に對して詩的指導性を與へんとするものだ。

大坪草二郎著

短歌初學

四六判三三二頁
定價一圓三十錢

本書は、正岡子規を宗とする寫生の説を根據とし、島木赤彦の「歌道小見」を祖述して、先づ短歌の根本精神より説き起し、實際の規範を列舉しつつ短歌の大道を明示し、初學者のために平明懇切なる指導を期せんとするものである。その叙述は平易明快、飽くまで實際に即したもので、これこそ最も一般的な要望に答へ得る短歌入門書たることを信じて疑はない。

川田 順著

定本吉野朝の悲歌

菊判六〇〇頁
定價三圓八十錢

(徳富蘇峰氏評) 本書は實に現代の歌人たる川田順君が、時局に感憤の餘、吉野朝延六十年の歴史を、當時の短歌によりて、敘述したるものである。本書は單に歌を排列したばかりでなく、各首毎に著者の註脚が加つてゐる。著者の勞も決して尋常ではない。著者は考證的史家の常套に陥らずして、所謂吉野朝の時代精神を把持し、時代精神を發揚するに努めてゐる。

川田 順著

寒窓記

四六判三五〇頁
定價一圓七十錢

著者が最近の研究、歌論、考證、隨筆を蒐めて一卷とせるもの。第一部「戰國武人の歌」は六十餘種の軍記物を主要の典故とした苦心の研究であり、第二部「短歌俳句諸論」は、新古今論から現代作家論まで數章に互つて論述し、第三部「幕末と吉野朝」は、『吉野朝の悲歌』『幕末愛國歌』を更に捕足すために書かれたものである。第四部「隨筆篇」は主として身邊を敘す。

川田 順著

晚來抄

四六判三一頁
定價一圓五十錢

竹柏園の出色として故木下利玄と雙んで輝かしき出發をなした川田氏は、爾來四十年、つねにより高き境地より新しき世界を求めて不退轉の精神を續けられた。今やその刈入れの秋に到達した。本書は全卷八百三十餘種の短歌を中心に配する詩・隨筆・感想・評論の粹を配した氏の全貌を結像する立體鏡。一顆一顆丹誠をこめたその果實は、茲にその豊饒と芳香を誇つてゐる。

土田 杏村著

短歌論

四六判二〇一頁
定價一圓

短歌革新の火の手があげられてから全国的にひろがり行く自由律現代語歌の勢力を見よ。今や革新短歌は大衆の中に蘇り、大衆の文藝としての底力を張つて來てゐる。著者は本書の中で、革新短歌の理論を根本的に論じ、また日本の短歌が發生以來いかなる經過を取つて今日まで達したかの歴史を敘して、短歌の本質革新の必然性を論じてゐる。

水原秋櫻子著

現代俳句論

四六判二八六頁
定價一圓三十錢

本書は、現代俳句建設の功勞者たる水原氏の多年の蘊奥を傾倒して成つたもので、詩の第一線に立つ俳句の本質觀に觸れて、その作法及び鑑賞態度を説いた無比の手引書である。即ち第一部では俳句の本質に關する研究と解説、第二部では作品の實例を引用しつつ作法を説き、第三部では現代の代表的名句を擧げて、これに新しい角度から解釋を加へて新俳句鑑賞をなす。

水原秋櫻子著

冬雲雀

四六判三九〇頁
定價一圓五十錢

現代の新興俳句界の統率たる水原秋櫻子氏の作品集。俳句となつて結晶する珠玉の文字は、また散文に於いても流麗無比の光りを放つてゐる。これは俳句と散文とのこよなく美しい交響曲である。本集には特に葛飾を主題とした俳句と散文が多く、氏の第一句集「葛飾」時代が、この書の内容に成つてゐる。ここには、氏の文學的成長の美しい足跡が示されてゐる。

水原秋櫻子著

若鮎

四六判三〇八頁
定價一圓三十錢

(著者の言葉) 前集『冬雲雀』につづくもので、昭和七年より九年までに發表した俳句、感想、評釋、添削、紀行の中から、自分の氣に入つたもののみをあつめてある。この三年間は私が一番勉強した時代である。その時代の收穫がこれだけのものにすぎぬのは恥かしいことではあるが、著者としては最善の努力を盡してあるのでこれ以上仕方がなかつたといふ氣持はある。

水原秋櫻子著

蘆の花

四六判三〇四頁
定價一圓五十錢

これこそ最も新鮮な最も芳醇な現代俳句文學の輝かしい精華であり、麗しい果實である。日本の傳統的風韻と現代的リリズムとの交錯する豪華な花園である。「冬雲雀」「若鮎」に續いて、本集により、著者の俳句文學に於ける業績の精髓は完全に凝集せられた。本集に收めた作品は、未發表のものも多く、殊に俳句は全部未發表のもので新鮮味溢るる珠玉篇である。

水原秋櫻子著

新雪集

四六判二七二頁
定價一圓三十錢

(著者の言葉) 「新雪集」といふのは新しくつもつたと云ふ意味である。現在の俳壇は昔と比べて新しくなつてゐる。しかしそれだけにまた多くの主張が入り亂れて歸するところを知らぬ有様である。この集に蒐めた文章が、この混亂を整理することに役立ち、その上に降りつもる新雪になつたら著者はどんなに嬉しいことかと、そんな空想の翼をひろげたりするのである。

山口誓子著

夜月集

四六判三五八頁
定價一圓五十錢

山口誓子氏は句作に評論に現代俳句文學に正にコペルニクスの轉廻を與へた新星である。氏によつて俳句は純粹詩として出發し、俳句論は從來の單なる印象批評から文學の本質論に高められた。つねに新しき藝術を希求する氏の氣魄と熱意は、視角の近代化、資料の擴張、表現様式の新化を意圖して倦むことを知らない。本書は氏の最近の俳句、批評、感想、隨筆の一大集成。

日野草城著

新航路

四六判二七二頁
定價一圓三十錢

氏は俳壇の最も先驅的なモダアニストであり、新しい時代が生んだ最も魅惑的な感覺の詩人である。氏はつねに知性の透明なレンズを透して、現代文化と生活の多彩な意匠を吸收する。或ひは近代女性の心理を解剖し、或ひは官能と愛情の世界を大膽に活寫して、而も絹の如き柔軟な光澤を放つてゐる。新しき俳句精神は氏に於いて最も美しい飛躍と發展とを遂げてゐる。

荻原朔太郎著

詩の原理

四六判三二〇頁
定價一圓三十錢

この書で、著者は詩の根本問題、即ち詩的精神、文學に於ける詩の位相、詩の表現原理、詩と文學の關係、詩の概念の本質、等に對する第一原理を検討した。從來の詩書のごとき、單なる韻律の註や、名詩の解説や、入門手引や、獨斷的詩論の主張などは異つて、それらの部分的思考以前の、人生、藝術、文學に於ける詩の位置を認識して、その本質を究明してゐる。

903
57

終

